

32. ゲツセマネという所に来て、イエスは弟子たちに言われた。「わたしが祈る間、ここにすわっていなさい。」
33. そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネをいっしょに連れて行かれた。イエスは深く恐れもだえ始められた。
34. そして彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、目をさましていなさい。」
35. それから、イエスは少し進んで行って、地面にひれ伏し、もしできることなら、この時が自分から過ぎ去るようにと祈り、
36. またこう言われた。「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。」
37. それから、イエスは戻って来て、彼らの眠っているのを見つけ、ペテロに言われた。「シモン。眠っているのか。一時間でも目をさましていることができなかつたのか。」
38. 誘惑に陥らないように、目をさまして、祈り続けなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」
39. イエスは再び離れて行き、前と同じことばで祈られた。
40. そして、また戻って来て、ご覧になると、彼らは眠っていた。ひどく眠けがさしていたのである。彼らは、イエスにどう言ってよいか、わからなかつた。
41. イエスは三度目に来て、彼らに言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。もう十分です。時が来ました。見なさい。人の子は罪人たちの手に渡されます。」
42. 立ちなさい。さあ、行くのです。見なさい。わたしを裏切る者が近づきました。」

説教

38 節は今年の聖句です。今年度は、お祈りする生活を強化することをお互いの目標にしたら良いのではないかと思います。聖書を読んで祈る生活は、私たちキリスト者の基本的な生活です。

「誘惑に陥らないように、目を覚まして、祈り続けなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」(38) これは、イエスさまがゲツセマネの園で弟子たちに言われたことばです。

イエスさまは、十字架で死なれる前の晩、弟子たちとの最後の晩餐をすませた後、弟子たちと一緒に讚美しながらオリーブ山に行かれます。そして、そのふもとにあるゲツセマネの園に、弟子のペテロとヤコブとヨハネを連れて行き、そこで祈ります。その際、弟子たちには、「わたしが祈る間、ここにすわっていなさい」、「ここを離れないで、目を覚ましていなさい」と弟子たちに命じてから、少し進んで行った所で、イエスさまは地面に平伏して祈られたのでした。

しかし、それからおよそ一時間経って弟子たちのところに戻ってみると、目を覚ましているよう命じておいた弟子たちは、睡魔に耐えかねて、みな「眠っているのを見つけ」ます。それでイエスさまは、寝ているペテロを起こして、こう言われたのです。「シモン。眠っているのか。一時間でも目を覚ましていることができなかつたのか。誘惑に陥らないように、目を覚まして、祈り続けなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」

「誘惑」は「テスト、試み、罪への誘惑」という意味の言葉です。つまりイエスさまは、これから自分たちに信仰の「テスト、試み、罪への誘惑」が襲いかかってくるのだから、悪魔が仕掛けてくる罪への誘惑に打ち勝って信仰のテストに合格するよう、「目を覚まして、祈り続けなさい」と弟子たちに言われたのです。この時、彼らに襲いかかる悪魔の誘惑とは何だったのでしょうか。イエスさまにとっては、苦しい十字架にかかって死にたくないという誘惑であり、弟子たちにとっては、自分の命惜しさにさっさとイエスさまを見捨てて逃げ

るという誘惑でした。

イエスさまが祈られた通り、本来、イエスさまは十字架で死なれる必要はありませんでした。イエスさまは罪人ではありません。父なる神のさばきを受ける必要はありません。しかも、罪人の身代わりになる必要もありません。人間は人間で、罪人は罪人で、自分の罪の故に神のさばきを受けて、神に呪われればよいのです。ですから、「アバ、父よ。どうぞこの杯をわたしから取りのけてください」との祈りは、正当であり、正しいのです。罪人の身代わりになって十字架で死にたくないというイエスさまの祈りは、正しい、正当な祈りでした。でも、それは確かに正しいのですけれども、それなら、人類は誰ひとり救われません。全人類はひとり残らず罪人なのですから、ひとり残らず神の怒りと呪いを受けて滅びなければなりません。

それで、「アバ、父よ。どうぞこの杯をわたしから取りのけてください」との正当な祈りをイエスさまが父なる神にささげた時、より正しい応答が父なる神から示されました。それは、罪人の身代わりに死ぬ必要がないという正当な権利を捨てて、罪人の身代わりになって十字架で死ぬという道です。そして、これが父なる神のみこころでした。それで、「アバ、父よ。どうぞこの杯をわたしから取りのけてください」と祈ったイエスさまは、激しい葛藤の末、こう祈りました。「しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。」時間をかけて祈る中で、揺るぐことなき父なる神のみこころを確信したからです。こうして、イエスさまが父なる神のみこころを知り、それを実行するためには、祈ることが必要でした。しかも、一時間という時間をかけて、それを三度も繰り返し、一晩中、少なくとも三時間はかけて、じっくりと祈られました。そうした深い祈りを経て、イエスさまは父なる神のみこころを確信します。そして、それを実行する力を受けたのです。

このように、祈りは、父なる神の恵みとみこころを確信させます。勿論、神の恵みとみこころは、聖書に余すところなく啓示されています。しかし、私たちがあまりに慌ただしくて、それを読む暇がありません。読んでも考える余裕がありません。そうなれば、神の恵みもみこころも知ることはできず、確信もできません。そして、確信できないことを実行することは不可能です。実行し通すことはさらに不可能です。この世は罪に満ちており、神への反逆だらけです。イエスさまは最期まで「十字架から降りて来い」との声と戦いました。神への反逆渦巻く世の中で、私たちが神の恵みとみこころを確信する道は、ただ祈ることです。時間をかけて、じっくりと聖書を読んで、祈らなければなりません。祈る時、神の恵みがわかります。そして、神のみこころを確信するのです。祈らなければ、弟子たちのように、「誘惑」に打ち勝つことはできません。目の前に起きていることが、神からの「テスト、試み、罪への誘惑」であることもわからず、ただ目の前の現状にあたふたと対処するだけに終始します。そして結果的に、弟子たちのように、わけもわからないままに、「誘惑」に負けて罪を犯してしまいます。

弟子たちは、この直後にイエスさまを捨てました。さらに正確に言うと、イエスさまを信じる信仰の告白を捨てたのです。それを貫けば、イエスさまと同様に自分もまた殺されるからです。この事件の直前、ペテロは「たとい、ごいっしょに死ななければならぬとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」と力を込めて威勢よく告白しました。それは立派な告白でしたが、その告白の真価が試された時、あっさりと「試験」に落ちてしまいます。これが人の現実です。人の力はあまりに弱くもろいものです。他人事ではありません。祈らなければ、誰でもこうなります。祈らなければ、神のみこころを知ることができません。日々容赦なく私たちに試練が襲いかかります。

そしてその試練は、神さまからの「試験」でもあります。何が神のみこころであるかをよく見分けなければなりません。そうでなければ、試験で失敗してしまいます。結局、この時祈らなかった弟子たちは、「試験」で失敗しますが、イエスさまはそのことも既にご存じで、氣勢を上げるペテロに「お前はわたしを三度知らないと言う」と予告します。でも、イエスさまが復活して、ペンテコステで聖霊により立ち直ってからは、イエスさまのように、死をも恐れず、大胆に証しするよう豹変します。ペテロの手紙を見ると、自分の過去を回想してか、「信仰の試練は、金よりも尊い」、「たとい義のために苦しむことがあるにしても、それは幸いなこ

とです。彼らの脅かしを恐れたり、それによって心を動揺させてはいけません」と教訓を残して、確かに立派に立ち直ったのだと思います（1ペテロ 1:7, 3:14）。

「誘惑に陥らないように、目を覚まして、祈り続けなさい。」こう命じた後、イエスさまはこう付け加えます。「心は燃えていても、肉体は弱いのです。」「心」は「霊、聖霊」のことで、「燃えている」は「意志する、覚悟する、進んで（喜んで）～する、熱望する」を意味します。そして、「肉体」は訳語の「肉体」というよりは「人間の生まれながらの性質」を意味します。つまり、聖霊は燃えているのです。そして、聖霊には明確な意志があります。聖霊には、神のことば通りに父なる神のみこころを成し遂げたいという誰よりも強い強烈な熱望があるのです。

でも、聖霊によって生まれ変わらない、あるいは祈らない霊的に死んでいる（眠っている）生まれながらの人間は「弱い」のです。完全に無力です。何もできません。何一つ神のみこころを行えません。神を知らないのです、神のみこころを行うことができないのです。この時の弟子たちのように、ただ眠るだけです。そして、試練が襲いかかると、それに負けてしまいます。神のみこころではなく、罪を犯します。「聖霊は燃えているが、肉は弱い」のです。

だからこそ、祈らなければなりません。イエスさまは言われました。「誘惑に陥らないように、目を覚まして、祈り続けなさい。」祈る時、聖霊に満たされて、心きよくされます。知性が明るくなります。神を知ることができます。聖書のことばを悟ります。神の恵みを悟ります。そして、神のみこころを悟るのです。

今年は、教会のバビロン捕囚も遂に 69 年目で、残り約一年で神の呪いが満了します。一方で、社会の急激な右傾化で、今後、冬の時代に突入していくようです。戦時下、日本の教会は、悪魔の惑わしに敗れて、偶像崇拜とアジア侵略の罪を犯し、「三代・四代」の呪いを今日まで味わってきました。戦後はまた、「日の丸・君が代」問題で試され、原発問題で悪魔の惑わしに負けてしまいました。今は、集団的自衛権の問題で、いよいよ世界中で日本が戦争に関わろうとしています。そうなると、もはや戦時下となります。今、この時代に教会が発言すべき問題は本当に多いです。

こうした教訓を生かし、今、この時代にあって何が神のみこころであるかをよく判別しなければなりません。そして、どんなに困難でも、神のみこころを全うしなければなりません。原点に戻ってよく祈り、聖霊の全面的な助けを受けて、あらゆる困難に耐えて神のみこころを全うしましょう。